

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価		学校関係者評価		改善策							
							達成状況	評価	考	評価								
①学習指導	確かな学力の育成	生徒一人一人の教育的なニーズに応じた、適切で丁寧な指導を展開する。そして、必要な支援・援助を大切にしながら丁寧な指導を目指す。また、全国学力・学習状況調査等の結果をもとに、授業改善の方策を考え、実行することで、授業力を向上させる。さらに、学校・家庭との学力観の共有を図り、家庭学習の充実に向けた取組を推進する。	わかる授業づくりに取り組むとともに、TT指導を充実し、学習内容が未定着の生徒への個に応じた指導に力を入れる。	授業の工夫やTT指導の工夫、個別支援(取り出し、補充等)の充実により、基礎・基本の定着を図る。	A	教員の授業力が向上し、基礎・基本が定着し、学力の二極化の改善が見られる。学習意欲が向上し、家庭での予習が習慣化	全教科において、黒板に「学習のねらい」を提示し、授業の「ねらいと内容」を明確にすることにより、授業に対する生徒の意識と意欲を高めることに努めた。ただ、授業の振り返りが次時に行われることが多かった。その授業の中で振り返りの時間を確保することが、学力の定着に大切なことであり、今後の課題と言える。また、基礎・基本の定着だけでなく、上位層を増やすとともに、上位層に対して発展的な課題に取り組みさせることも今後の大きな課題である。 授業では、ICT(教育機器)や授業ワークシートを活用し、わかる授業づくりに努めた。 また、数学・英語・体育を中心に全教科において、学習支援員も含めたTT指導体制を取り、つまづきのある生徒へのきめ細かな指導を推進し、基礎・基本の定着に力を入れた。	B	生徒に分かる授業づくりの取組をされたのは評価できる。学力の二極化の改善はまだ見られないが、そのためにはTT指導体制の充実が求められる。ぜひとも学習支援員の増員と、教員の資質向上につながる方策の充実を望む。 上位層を増やすことも大切ではあるが、全体的な底上げにも力を入れてほしい。 なぜ、授業の中での振り返りの時間を確保するのが難しかったのかを探っていただき、今後の改善につなげて行ってほしい。	B	県学力調査結果を受け、年度末に再検討した学力育成アクションプランを基に、より一層の授業改善を進める。「ねらい」の提示や「振り返り」の時間の確保など、授業のポイントをしっかりと押さえることで、生徒が家庭学習を意欲的にやるような道筋を立てていく。また、引き続きICTの活用やTT指導体制の充実を推進していく。つまづきのある生徒へは基礎・基本の定着を進め、上位層については発展的な学習課題を提示することでの、全体的な学力の向上を進める。							
			家庭学習習慣の確立により、学力の定着を図る。	各教科の工夫により、予習を中心とした家庭学習の習慣を定着させる。家庭学習調査を行い、毎日の平均120分以上を目標とする。	A	各教科の工夫により、家庭学習が定着(120分超)						試験期間中では、学習意欲も高まり130～190分の家庭学習であり、各学年とも目標値に達している。しかし、通常日においては3年生が84分、1・2年生は60分程度にとどまっており、家庭学習のより一層の習慣化が求められる。特に、予習を中心とした家庭学習の充実をめざしているが、この時間では不十分と言わざるを得ない。家庭学習の充実につながる授業改善の推進、課題の評価を確実に生徒にフィードバックさせる等の取組を一層進めていく必要がある。また、ネット利用の家庭内のルール作りを行って2年となるが、その遵守状況も十分とは言えない。家庭での過ごし方について根本的な見直しが必要だと考えられる。	C	昨年よりも充実した指導がされていると思うが家庭学習の習慣づけはまだできていない。小学校でも同じような取り組みをしていると聞くが達成状況はどうなのか？小学校でできていないか。小中連携で考えてほしい。また家庭学習の時間の長さだけに捉われず、内容や集中力なども大切だと思う。 家庭学習並びにネット利用の家庭内ルールづくりは保護者の協力が不可欠なので、保護者への周知・確認を徹底してほしい。	C	予習を中心とした家庭学習のスタイルは引き続き進めていくが、併せて既習事項の定着という意味でも復習的な課題に取り組みさせることにより、家庭学習の習慣化を確立させる。そのためにも、「ねらい」「振り返り」をしっかりと行う授業改善を進めることが前提となる。また、継続して家庭学習時間の調査を行う。その際、学習時間のみならず、家庭での生活全般についての調査も行う。		
進路保障を基盤とした人権・同和教育の校内研修を計画的に推進し、生徒会と連携を図った活動を展開する。特に「いじめ防止」に関しては、いじめを許さない環境づくり(「隠れたカリキュラム」)を構築する。	職員研修を定期的に行うとともに「いじめ防止基本方針」の見直しを行い、「いじめ防止委員会」を機能させる。また、生徒会による主体的な人権啓発活動により、職員、生徒の人権感覚の向上を目指し、いじめを許さない「爽やか江中」「凛とした江中」「強い江中」「やさしい江中」を創造する。	A	職員研修、生徒会の人権啓発活動により人権感覚が向上	職員会で、小学校の歴史学習の中での同和問題学習について、県教委から出されているリーフレットを使用して研修を行った。また、校長からも機会ある毎に研修を受けた。「生きるということ」という演題で三浦成人さんの人権講演会を開催した。その事前学習として、小学校から学習してきた同和問題の歴史について社会科の学習を学年ごとに行った。その際、この事前学習の内容について、職員の共通理解を図った。 生徒指導部を中心に研修職員会として、国立教育政策研究所の「いじめに関する研修ツール」を用いて、いじめに関する校内研修を実施した。 生徒会による啓発活動として、「いじめ」や「いたずら」についてのアンケートを実施した。生徒集会で考える時間をもったり、生徒一人一人の人権に対する思いを「絆の木」としてまとめ、校内掲示をし、一人一人の人権を守る気持ちを確認したりした。ただ、継続的な取組にはなっておらず、生徒会活動への結びつけは今後の課題である。	B	小学校で習った同和問題学習を、中学校でも引き続き取り組むことは意義があり評価できる。計画的に講話・講演を実施されたことは評価できる。生徒会主導で、いじめ問題に取り組んでいることはいいことで、アンケートを実施したことなども評価できる。しかし、友だち、親子、その他の関係において言葉で表すことが難しいということを学校は認識し、正面から生徒と向き合うことが「いじめ」を無くす大切な手がかりだと思う。 また、「いじめ」と一言で言ってもいろいろな種類があると思う。人として決して許されない行為であるか、深刻ないじめにつながるような見逃せない行為であるか、見極められる目を育てる教育をしてほしい。今後も生徒会活動の一つの柱として継続していただきたい。											B	年間を通じて継続して計画的に人権・同和教育に関する職員研修を実施していく。いじめ防止基本方針の点検や見直しを行い、それに基づいた、いじめ発生の未然防止に努め、根絶をめざす。そのためのいじめ防止委員会を積極的に活用する。特に、生徒指導主事と人権・同和教育主任の連携を強化していく。 生徒会でも、「いじめ撲滅」をテーマにあげ、年間を通して取り組ませる。特に、人権集会や人権宣言等に取り組めるような手だてを講じる。
		B	職員研修、人権啓発活動を実施															
		D	職員研修、人権啓発活動が不十分															

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価		学校関係者評価		改善策								
							達成状況	評価	考	評価									
① 学習指導	学校図書館・読書活動の推進	読書や新聞など、活字に親しむ生徒を育てる。	朝読書を継続して行い、学校図書館利用増を目指しての読書推進活動を充実する。	昨年以上に図書館の利用者が増加し、家庭でも読書の習慣化を図る。また、図書館の「学習・情報センター」としての機能を十分に活かした取組を行う。	A	図書館利用が増加し、家読が定着(家読30分以上)	図書館利用(貸出し冊数)については、2年生が前年比の8割(630冊)へと減少しているが、1年生は昨年の1年生以上の貸出し数(960冊)を示し、3年生が前年比1.3倍(990冊)と増加している。学年間の差はあるものの、全体としては利用者が増加していると言える。テーマ別の図書を紹介や新着図書の積極的な紹介、図書館便りによる情報提供などが効果的に働いていると思われる。 家読については、継続的な取組が不十分なままで、生徒に対する働きかけや家庭との連携に課題が残る。学校での朝読書は十分定着しているが、読書の習慣化を図るためには家読の充実が欠かせない。今年度の平均は約13分で0分の生徒も各学年半数いる。まずは全員が家読に取り組むことを目指したい。	B	大変充実した図書館で、生徒への環境は整っていると思う。 図書館利用が増加したことは評価できる。さまざまな取組が良い結果につながったのだと思う。継続してほしい。 全員が家読の時間を増やすことは難しいと思うが、各学年半数を示している家読の時間が少ない理由が何かを調べ、改善策につなげてほしい。 また、家読の時間が増やせないのであれば学校での朝読書の内容をより充実させてはどうか。 読書の重要性を学習と結び付けて生徒たちに考えさせてほしい。	B	図書スペースの使い方についての確認を行ったこともあり、図書館の利用は着実に増えている。引き続き、「入りやすい図書館」として、利用者数の増加に努める。読書は表現力、思考力、想像力の育成にも役立つことであり、朝読書の充実に努めるとともに、それを家読につなげていくための方策を検討していく。特に、朝読書については、何らかの工夫を講じ、意欲のさらなる向上や書くことの習慣化等、より一層の効果ある日々の積み上げを検討していく。								
	言語活動の充実	授業の中で積極的に「言語活動の充実」の視点からの取組を行い、生徒の思考力、表現力、判断力を向上させる。	各教科等で、思考力、表現力、判断力を高める手立てを行う。	全教科の授業で工夫を凝らした思考力、表現力を高める活動を実施する。そのための教材開発の工夫及び授業形態の工夫・改善を図る。	A	全教科で表現活動を実施し、思考力・表現力が向上					各教科で、思考力・判断力・表現力の育成のために「言語活動の充実」を図る工夫を行っている。ペア活動やグループ活動など学習形態の工夫をしたり、ICTなどを用いて教材開発や工夫をしたりすることで徐々に成果が出てきた。学習意欲や基礎学力向上が思考力や表現力等の育成につながると考えており、授業改善を常に念頭に入れた実践を今後も継続して行う必要がある。	B	ここ数年の継続した取組の成果が出始めているのは良い傾向である。より一層授業内容の工夫に取り組み、生徒の思考力、判断力などの向上を図っていただきたい。学習形態の工夫もされ生徒の力になっていると思う。特に情報通信機器を活用されたことは高く評価できる。 表現がうまくできない子でも自分の考えをしっかりと持っている子もいると思うので、そういう子に対しても授業の工夫をしていただきたい。	B	公立高校の入試制度が変更となり、学力検査においても、思考力・判断力・表現力を問う設問が増えることが明確となった。このことに対応していく意味でも、より一層授業において言語活動を推進していく必要がある。学習形態、教材開発、ICTの活用について、より一層努力していく。また、日常の場面においても、生徒のコミュニケーション能力の育成を念頭に置いた指導を進めていく。				
	② ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	キャリア教育の体制を整えるとともに、将来に生きる大きな夢や希望を育む、ふるさと郷土・地域に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源(ひと・もの・こと)を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む、福祉体験、上級学校調べ、職場体験等の活動が系統的に、より一層充実するように努める。また、地域の「ひと・もの・こと」を活用することで、地域の魅力や課題の理解を進める。	A							ふるさと・キャリア教育を計画的に実施し、意識が向上		5月には「ふるさと探訪」を行い、地域の「ひと・もの・こと」を活用した活動ができた。また、1年生で福祉体験学習、2年生で企業訪問と上級学校調べ、3年生で職場体験学習を行った。各学年とも、前年度の反省を活かしながら、内容の見直しや精選を実施し、全学年で充実した体験学習となった。また、全体でもキャリア教育講演会を実施し、生徒の意識啓発につながったと考える。地域にある、ひと・もの・こと、といった豊かな教育資源を活用した取組ができています。地域の方が取組を好意的に受け止めてくださるので、連携がうまくいっている。今後も、ふるさと江津への貢献意欲を持った人材の育成のための取組を継続していきたい。さらに、江津・島根と日本・世界との関連性をもたせるような幅広い視野でふるさとをとらえさせる視点も必要である。	A	系統的なふるさと教育はここ数年できています。地域に積極的に出ていくことで中学校の考え方が地域の人たちに伝わっていく。江津を愛し、ふるさとを支えていく人材になる生徒が育てば嬉しい。キャリア教育講演会は毎年生徒の進路に大きい影響を与えているので、今後も計画的に実施してほしい。 縦のつながりも考えて計画を立てられ、充実した学習が行われていると評価できる。将来につながる大切な取組だと思うので、ぜひ継続してほしい。ただこれは本来学校でなされるべきものなのだろうか？地域の教育力の衰えも痛感させられる。	A	校区内ふるさと教育全体計画の内容をふまえた「ふるさと・キャリア教育」の全体計画、年間指導計画を作成し、計画的かつ系統的な啓発活動や体験活動を実施していく。生徒が積極的に地域と関わり、地域に貢献していこうとする意欲や態度の向上を図っていく。
						B							全学年、充実したふるさと・キャリア教育を実施						
C						ふるさと・キャリア教育を計画的に実施													
D						ふるさと・キャリア教育を計画的に実施できず													
③ 生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	躰教育を核とした生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し、生徒の基本的な生活習慣、規範意識が向上する。情報モラルについての取組を一層強化する。	A	生活習慣、規範意識が向上し、ネットトラブル等が起きない	来校される方から挨拶や履き物の整頓がきちんと出来ていると評価をいただくことが多く、生徒たちも自慢できることの一つとして定着してきている。また、情報モラルについての講演会を学期に1回(年2回)実施するとともに、家庭とも連携し、ルールづくりを進めることができた。 しかし、校内の物が壊れたり落とし物が例年以上の届けられられたりするなど、公共物を大切に扱う気持ちが薄れたり、自他の区別がつかない行動があり、指導することが多かった。また、「ネット利用の家庭内の約束」もあまり守られていない実態があり、家庭への啓発を今後一層取り組んでいく必要がある。	B	生徒の挨拶は、はきはきしていて気持ちが良いが、中には校内と校外のギャップが見られる生徒もいる。 靴揃えも自然にできていると思う。生徒会を中心とした、ふるまい向上運動の成果である。継続した取組を願う。ただ物を大切にするという心は不十分だと感じる。情報モラルに関する取組は、なかなか約束が守られていない。ネット利用に関する家庭内ルールに、親子間での認識の差が激しい。家庭内での話合いの指導を続けてほしい。今後更にネット社会は進化していくと考えられる中で、規範意識を維持・向上させているのは評価できる。 一部の家庭だとは思いますが、親の教育も必要だと切に感じる。	B	生徒の実態把握に努め、その基づく取組を推進していく。特に情報モラル教育については、学校と家庭の連携はまだ十分とは言えず、粘り強く家庭に対して啓発活動を進めていく。特に「ネット利用の家庭内の約束」については、引き続きPTAや校区内小学校との連携に努めていく。「家庭内の約束」の遵守状況については、年度途中で調査を行い、さらなる実態の把握に努めていく。								
					B	生活習慣、規範意識が向上													
					C	生活習慣、規範意識が向上せず													
					D	生活習慣、規範意識が下降													

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価		学校関係者評価		改善策													
							達成状況	評価	考察	評価														
④健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	生徒一人一人、自分の健康に配慮した生活習慣や食習慣が定着する。幼小及び家庭との連携により、健康に関する自己管理の意識が向上する。特に全校生徒の朝食摂取率を100%とする。	A	積極的な健康管理により、健康に配慮した生活が定着 生徒の朝食摂取率が継続して100%となる	B	給食後の歯みがきは95%以上の生徒が積極的に取り組んでいる。市役所の支援を受けて実施している歯科教室も定着してきており、今後も継続していきたい。 食の啓発になるようにと、ほけんだよりも必ず食事に関する内容を入れるようにした。だが、一方的な関わりであるため、生徒の反応等は確かめられていない。 12月に取り組んだ朝GOはんウィークのアンケート結果によると、朝食を「毎日食べる」と答えた生徒は92%であった。9割は越えているが、「ときどき食べなかった」が7%、「食べない」が1%であり、今後も継続して指導を行う必要がある。また、家庭への啓発や呼びかけの工夫も必要。	B	歯科保健指導が継続的に実施され、ほとんどの生徒が昼食後に歯磨きをしていることは大変喜ばしい。朝食を毎日食べる子が90%を超えているのは評価できる。更に100%に近づけるために”朝ごはんウィーク”のアンケートを年度当初に行い、朝食の内容も把握した上で、朝ごはんの大切さを家庭へも呼びかけ、バランスの良い食事づくりも考えていただきたい。	B	基本的な生活習慣を確立するために、引き続き健康教育と食育に力を入れる。学校と家庭が連携し、生徒が自己管理能力を向上できるよう努める。特に「食育」については引き続き、重点課題として取り組み、地元の生産者の方と連携した取組を推進していく。また、朝ごはんの摂取率については、あさGoはんウィークの取組も大切にしながら、100%達成できるよう努めていく。												
	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため、家庭での健康・体力づくりを行う。	A	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践							B	5月から11月まで体育委員会の活動として、「体力向上のあゆみ」と題し、毎日の家庭での運動時間を計測したところ、1年生11分、2年生16分、3年生10分と各学年とも平均時間は10分を超えた。しかし、3年生は部活動を終えたあとから徐々に家庭での運動時間が減り、運動に取り組めていない状況である。また、全体を通じて家庭での体力づくり0分という生徒もおり、運動を行っている生徒とそうでない生徒の二極化が進んでいる。 生涯体育のことを考えると、今後さらに家庭への啓発活動や生徒への呼びかけを継続し、運動方法の指導の改善と工夫をしていく必要がある。	B	家庭での体力づくりが平均10分を超えるなど、全体的に改善されて良い方向に進んでいると思う。ただ二極化が顕著であり、やってない子どもへの対応が課題である。運動が苦手な生徒や、やり方が分からない生徒もいると思うので具体的な方法を示すなどして体力づくりに取り組めるように対処してほしい。 家庭へも働きかけて、共にできるような体力づくりの方法も模索していただきたい。	B	年間を通して継続して体力づくりに取り組めるような手だてを講じる。同時に、運動をすることが好きだと思える生徒がさらに増加するよう、体育の授業においても積極的に授業改善に努めていく。						
⑤安全管理・指導	学校安全の推進 安全対応能力の向上	信頼され安全で安心な、明るく楽しい、爽やかで凜とした学校をめざした危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと、毎月15日の安全点検実施に伴い、点検・修繕・修理を迅速に行う。	A	マニュアル改善、点検・修繕等を迅速に実施し、安全推進													A	危機管理マニュアルの見直しに関しては「差別事象に関する危機管理マニュアル」の改善と「いじめ防止基本方針」の見直し、食物アレルギー発生時の対応」の確認を行った。また、少年の主張県大会が市民センターで行われたことをきっかけに、市民センターにおける危機管理マニュアルも作成した。 安全点検については、報告があがったものについては、事務の協力も得て、なるべく迅速に確認、修繕等ができた。ただ、各担当者に忙しい中で行ってもらうことなので、点検のための時間を見つけていく報告が滞ってしまうことが多かった。毎月の安全点検を確実に行ってもらえるよう、もっと啓発していく必要がある。 生徒の委員会活動とタイアップできると、よりきめ細かな安全点検ができるようにも思う。	A	危機管理マニュアルの見直しができることは評価できる。安全点検については、今後も毎月定期的に点検していただきたい。校舎も新しく、校内の安全管理には目が届きやすいと思う。安全点検に、生徒・保護者の意見も取り入れた方が良い結果につながると思う。 また、毎年のように生徒会活動とのタイアップを言っているのにできていないのはなぜか？連携を図れる仕組みづくりを望む。 食物アレルギーなどその他の危機管理にもきめ細かくに対応しようとしているのは評価できる。	B	引き続き危機管理マニュアルの点検及び必要に応じて改善に努める。安全点検が形式的なものにならないよう、複数の目で点検していく体制を整えていく。また、PTA環境部や生徒会など、教員以外の目線からも安全点検に係る機会を設ける。
					安全意識を高め、危機回避能力、危機対応能力の向上を目指す。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。																		
B	危機回避の講話、実習等を実施	C	危機回避の講話、実習等を一部実施	D	危機回避のための講話、実習が不十分																			

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価		学校関係者評価		改善策											
							達成状況	評価	考察	評価												
⑥ 特別支援教育	校内・個別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実する。	個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実する。また、生徒理解に基づいた生徒指導の推進と進路保障の充実を図る。	特別支援教育コーディネーターを中心にして、個別の指導計画や個別の教育支援計画に基づいた指導・支援が充実する。	A	具体的な教育支援計画を作成し、支援の充実で効果大	B	特別支援学級生徒については、すべて個別の指導計画・個別の教育支援計画を作成し、学級担任と授業担当者が支援の方法等について連絡を取り合いながら支援を進めた。また、近隣の特別支援学校の体験学習を実施することで、各校への理解を深め、進路に対する生徒の意識を高めることができた。しかし、通常の学級の支援を必要とする生徒については、支援計画作成が遅くなってしまう場合もあった。今後は、各学年に設置された特別支援教育コーディネーター間の連携を強化し、計画的に支援を進める必要がある。	B	支援を必要とする子どもたちが楽しい学校生活を望む気持ちを大切にして、教職員、周囲の生徒みんなで見守り、それぞれに合った支援計画を作成してほしい。特別支援コーディネーターを中心として、それぞれの生徒の将来の為に計画的な支援を続けて行っていただきたい。通常の学級の支援を必要とする生徒にも計画的な支援体制を作してほしい。	B	今年度も遅れ気味となってしまったので、個別の教育支援計画に基づいた支援を年度当初から行う。その効果が現れるように、全職員で対応していく体制づくりを整備する。また、必要に応じて支援会議などを開くなど、タイムリーな対応と長期的な対応を行う。また、生徒の実態に応じ、具体的に使いやすい計画書の作成に努める。										
	関係機関との連携、他校との交流の推進	医療、福祉等の関係機関との連携を深め、積極的な情報交換を行う。	医療、福祉等関係機関、近隣の特別支援学校との連携を強化する。	関係機関、近隣の特別支援学校との連絡体制を整え、積極的に連携を図る。	A	積極的に連携を行い、支援が充実							A	他の関係機関との連携はできていると思う。小学校や通級担当者との情報交換及び共通理解を引き続き望む。	A	関係機関との情報交換は密に行っており、今後も継続して連携していく。支援を要する通常学級生徒が年々増えており、個に応じた対応がすばやくできるよう、綿密な支援計画を作成する。また、小学校との情報交換も早い時期からおこなうとともに、平素から連携がとれるような関係性を構築しておく。						
⑦ 研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、確かな学力を身につけ、主体的に学ぶ生徒を育成する。	校内研修の充実により、授業力の向上をめざし、研究主題の達成に努める。	校内研修推進計画を立て、公開授業や研究協議などの校内研修会を計画的に行い、授業力の向上を目指す。また、学力育成アクションプランを実行し、成果をあげる。	A	綿密な校内研修等により授業力が向上し、研究主題が達成。											B	全国学力調査実施後に全教科で「学力育成アクションプラン」を見直した。年度の早い時期に作成したことで、見直しをもって授業実践を行うことができた。今年度は学校訪問指導を学期に1度ずつ行い、参観した教員が評価を行ったり、研究協議を行い授業のあり方を研修したりすることで、授業力向上への取組は継続できたと考えられる。しかし、全教員による公開授業の実施は、計画通り実施できなかった。小学校、高校との連携も今後さらに深めたい。	B	年度の早い時期にプランを立てられたことは評価できる。学校訪問指導の取組により、良い方向へ向かっていると思うので今後公開授業などを通して授業技術の向上・教員のレベルアップを図っていたければ、生徒の学力の向上にもつながると思う。	B	来年度は県教研が江津市であり、本校も授業を公開する。これを動機付けとした授業改善を全教科で意識した取組を行う。研究授業は引き続き、計画的に実施する。授業後の意見交換の場をできるだけ多く設定するとともに、教科が異なっても、「ねらい」「振り返り」等、共通の視点での意見交換ができるよう、授業者も参観者もお互いに研鑽できる場としていく。
					B	綿密な校内研修を定期的実施																
					C	校内研修を実施																
					D	校内研修を一部実施																
⑧ 保護者、地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って、学校だより、ホームページ等で定期的に情報を提供する。また、メール配信システムを緊急連絡だけでなく、諸活動の案内としても有効に利用する。	A	学校だより、HP等による有益な情報を定期的に発信	C	月に一度の定期的な更新が滞ってしまい、情報発信が遅れてしまうことがあった。体育祭、文化祭などの大きな行事の際には更新したが、講演会、日々の授業での様子を発信することができなかった。何かの行事の際には、必ず写真を撮るよう各学年部に依頼しているので、それらを有効に活用していく必要がある。	C	学校だより、HPが地域への唯一の情報発信の場である。定期的なHPの更新を期待する。また、個人情報の取扱いには十分に注意を払っていただきたい。	C	今年度同様、学校だよりを定期的に発行するなど地域への情報発信に努める。HPをチェックされる地域の方が多くなっているといった実態もあり、定期的更新に努めていき、より開かれた学校づくりを推進していく。										
	学校間の円滑な連携・運動の推進	異校種間の連携・運動を図り、生徒の人間力の向上を目指す。	幼小中高の連携・運動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	幼小中高との交流・情報交換会、授業公開を積極的に行う。	A	幼小中高の計画的な交流により連携が充実							B	小学校との交流については、授業研究の案内を出し合うことで、常に交流の門戸は開いていた。生徒指導面に関しては教頭間や特別支援コーディネーターを中心に情報の共有に努めた。特に今年度は積極的に教頭間で情報交換を行うことができた。また、校区内の幼小と連絡を取りながら、江津中のテスト期間に合わせてノーメディア週間の実施を行った。高校との連携においては、「地域でつなぐキャリア教育」を介しての連携が積極的に実施できた。「ネット利用の家庭内の約束」づくりにおいては校区内小学校と連携した取組を行った。	B	ノーメディア週間の取組は幼小と連携で行われているが、達成状況の検証も必要だと思う。ネット利用の家庭内ルールづくりの取組はとても良いと思うが、作っただけで守られていないのが問題である。また、小・中・高の連携にあたっては、家庭の協力も欠かせないので、家庭に向けていろいろな情報発信をしているのは評価できる。今後も連携を図り、生徒が新しい環境に早く慣れて充実した中学校生活を送れるように努力してほしい。	B	小中高の情報交換、授業交流など連携・交流については計画的に実施していく。幼稚園からの連携の要望もあり、今後は保育園も含め、「幼保小中高」の連携に努める。一貫した育成方針のもと、生徒指導やキャリア教育を推進できるような体制づくりを企図する。ノーメディア週間については引き続き達成状況を調査し、さらに効果が上がるよう努力する。				
B	幼小中高の計画的な交流を積極的に実施																					
C	幼小中高の交流を実施																					
D	幼小中高の計画的な交流が不十分																					